2016（平成 28）年度

地域貢献活動報告書

西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

目　次

○　地域連携室の開設と地域貢献活動について　・・・・・・・・・・・・・・・　１

○　西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動（概要）・・　２

１．地域住民の健康増進のための食育活動の展開　・・・・・・・・・・・・・・　３

２．SAT システムを使った食事診断会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

３．近代化産業遺産（世界遺産）のマンガ教材（第２編）　・・・・・・・・・・　９

４．若松活性化事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１

５．小倉の食文化ぬか炊きの広報活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３

６．一緒にあそぼう　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１５

７．地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動　・・・・　１８

８．だいすき　にっぽん　子どもたちに伝えたい「食」と「あそび」と「ことば」
・・・・・・　２０

９．京築のヒノキと暮らすプロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２３

10．阿蘇カルデラ復興支援造成業務　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０

11．生き生きチャレンジキッズ　－クリスマスを待ち望む『アドベント』－
・・・・・・　３２

12．「お菓子の家」の展示発表会を通じた参加型体験学習による地域貢献の取り組み
・・・・・・　３７

13．カンボジア教育支援プロジェクト ANAKOT（カンボジア・スタディ・ツアー）
・・・・・・　３９

14．北九州市の食の魅力 PR パンフレット作り　・・・・・・　４１

地域連携室の開設と地域貢献活動について

教育・研究を地域に密接なものとして、その結果を還元していくことは本学の使命であり、地域に根差し、地域とともに歩むのが本学の本来の姿であると考えております。

本学では、今年度から始まる西南女学院大学・西安女学院大学短期大学部　将来計画 2016～2018 年度において、本学が進むべき方向として「地域に根差し、地域とともに歩む大学・短期大学づくり」を掲げました。

この地域貢献活動を推し進める組織として、2016 年８月に「地域連携室」を開設し、この地域連携室を軸に本学における学生の教育活動の一環としての地域貢献活動が開始されました。地域連携室は、地域貢献活動の企画、調査、及び学内外との連絡調整、広報等の業務を担います。

この地域連携室に管理運営組織として、「地域連携室運営協議会」を設置し、地域貢献活動計画の立案・評価、ガイドラインの策定・見直し、環境整備、地域諸団体等との連携関係の構築などを審議します。構成員は、学長、谷川保健福祉学部長、須藤人文学部長、戸田短期大学部長、浅野入試部長、伊藤教務部長、八尋学生部長及び伊東事務部長です。

また、地域連携室室長には、地域連携室運営協議会の構成員である谷川保健福祉学部長に就任していただきました。そして、地域連携室室長の下に室員を置き、今村准教授（副室長)、浅野教授、荒木准教授、天本准教授、高橋准教授、命婦准教授及び樋口教育支援職員に着任していただくこととなりました。この室員を構成員とする地域連携室室員会合が設置され、地域連携室の体制が整いました。

地域連携室が実施する事業としては、「西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部地域懇談会」、「地域連携協議会」、「地域貢献活動交流会」及び重点施策のワーキンググループとして、「地(知)の拠点大学による地方創生事業（COC＋)」での CCRC（生涯活躍のまち）構築に関するもの、子ども子育て支援に関するものの 2 つがあげられ、さらに調整課題として戸畑 D 街区の活用と大学生と NPO との交流会が挙げられました。

地域連携室運営協議会及び地域連携室室員会合は、８月以降、月１回のペースで開催され、2016 年度の地域貢献活動計画の策定、地域貢献活動実施計画の確認、地域連携室の本学ホームページでの紹介、地域懇談会の構成員の選定、地域貢献活動交流会の実施等を審議してまいりました。

いよいよ「地域連携室」がスタートしました。ここまで努力してくださいました教職員の方々に心より感謝申し上げます。この「地域連携室」の開設により、学生の教育活動の一環としての地域貢献活動がますます活発になることを期待しております。

学長　工　藤　二　郎

西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動（概要）

本学では感恩奉仕の精神にもとづき，女性らしい豊かな人間力と専門的な実践力で社会に貢献する人材育成を目指しています。座学に加え，学生たちが自ら学外に出向き，さまざまな課題に向き合い，できることをみつけていくことを大切にして参りました。これまでの学生参加の地域貢献活動を活動形態別にみますと次の６つに分けることができます。

① 市民公開講座：最新の知識・技術，生活の知恵などを提供する講義や演習
② 体験・アクティビティ：あそぶ，たべる，学ぶ，語り合うなどの体験型の企画
③ ピアサポートグループ活動：介護や子育ての悩みなどを参加者同士で受けとめ支え合うグループ活動
④ 提案とアクション：若い女性の視点を取り入れた商品開発や地域活性化への提案とアクション
⑤ 海外における貢献活動：アジア地域での地域貢献活動
⑥ そのほか

また，課題別にみると 6 つに分けることができます。

① 健康・食・運動
② 福祉・介護
③ 子ども・子育て
④ 学校教育
⑤ 産業・観光
⑥ 地域づくり

2016 年の地域貢献活動は 14 件でした。本報告書では，課題別に大きく＜観光と地域活性化＞，＜子ども・子育て支援と学校教育＞，＜食と健康＞に分類し（下表参照），それぞれの 1 年間の成果と課題をまとめました。本報告書は，この 1 年間の学生たちと教職員が地域の皆様とともに歩んだ道のりをコンパクトにまとめたものであります。これらが地域の皆様と私たちにとって共通の宝物となりますことを祈念しております。

表　2016 年度に本学で実施された地域貢献活動

＜観光と地域活性化＞
- 近代化産業遺産（世界遺産）のマンガ教材（第 2 編）　［小中学生と保護者］　p. 9
- 小倉のぬか炊きの広報活動　［市民，ぬか製造業者，観光業界］ p. 13
- 若松区活性化事業　［若松区住民，若松区役所］ p. 11
- 北九州市の食の魅力 PR パンフレット作り［北九州市産業経済局食の魅力創造・発信室など］p. 41
- 京築のヒノキと暮らすプロジェクト　［生産者，販売者］ p. 23
- 阿蘇カルデラ復興支援造成業務　［ASO 田園博物館］ p. 30

＜子ども・子育て支援と学校教育＞
- だいすきにっぽん　［地域の小学生］ p. 20
- 生き生きチャレンジキッズ　［地域の小学生］ p. 32
- お菓子の家　［市民］ p. 37
- 一緒に遊ぼう　［障がいのある子どもとそのきょうだい］ p. 15
- カンボジア教育支援ピロジェクト ANAKOT［カンボジア首都プノンペン近郊の中学生・高校生］p. 39

＜食と健康＞
- 地域住民の健康増進のための食育活動　［地域住民］ p. 3
- 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動［浅生スポーツセンター利用者］p. 18
- SAT システムを使った食事診断会　［一般市民と学生（ESD センター利用者)］ p. 6
- 3 大学連携講義「高齢者支援学Ⅰ・Ⅱ」準備状況　（次年度開催のため報告書掲載なし）

注)［　］内は協働のパートナーあるいは支援の対象です。報告書作成の段階で実施予定のものを含んでいます。

【２０１６－１】

企画名：地域住民の健康増進のための食育活動の展開

代表者名：清末　達人(保健福祉学部　栄養学科)

[概要]

1)目的、対象、内容など

背景：近年、我が国では生活習慣病等の予防、高齢者の健全な食生活の確保、伝統ある食文化の継承の重要性が指摘されている。特に、福岡県の野菜摂取量は 47 都道府県中、男性 43 位、女性 40 位と低位となっている。また、歯喪失の主原因である歯周病は 40 歳代から急増するが、歯周疾患健診の受診率は 3%と低迷している(平成 24 年度国民健康栄養調査より)。これらは、福岡県における地域住民の生活習慣病予防および歯・口の健康維持のための積極的な食育推進が必要と考えられる。

対象：公開講座の内容は学科ブログおよびチラシ配布により、主として北九州市内に広報しており、これまでの参加者の大半は高齢女性である。

目的：本学栄養学科および九州歯科大学による『食と健康』に関する啓発活動を通して、地域と大学との連携を深め、地域住民の健康増進に貢献することを目的とする。

2)実施日時、場所、参加者数、実施内容

◆第 1 回： 7 月 2 日(土)、　場所：本学 8101 教室、　一般参加者数：133 名

テーマ：『認知症って生活習慣病なの？～食事から始める認知症予防～』

内容：本学栄養学科の田川辰也教授による認知症の種類や危険因子、予防法などについての講演と、天本理恵准教授のゼミ学生による『認知症予防』体操を実施した。講演終了後には、本学栄養学科学生による『認知症予防食』の提供が行われた。講演開始までの時間を利用し、看護学科学生による血圧測定、栄養相談、骨密度測定等の食育イベントを実施した。

◆第 2 回：8 月 27 日(土)、　場所：本学 8101 教室、　一般参加者数：84 名

テーマ：『いつまでも、おいしく健やかに！～高齢期の食事を考える～』

内容：高齢者の健康寿命をいかにして伸ばすかについて、本学栄養学科の天本理恵准教授による講演と、本学栄養学科青木るみ子講師のゼミ学生が考案し、地場スーパー、ハローデイが製造・販売を担当した『和風弁当』の試食が行われた。また、講演開始までの時間を利用し、治療用特殊食品の紹介、骨密度測定等の食育イベントを実施した。

◆第 3 回：10 月 15 日(土)、　場所：本学 8101 教室、一般参加者数：105 名

テーマ：『ロコモティブシンドロームって何？～健康長寿は、身体づくりから！～』

内容：本テーマの導入として、医師の立場から本学栄養学科田川辰也教授、身体づくりの実際について本学福祉学科稲木光晴教授による講演が行われた。その後、九州歯科大学口腔保健学科の高橋由希子助教、本学栄養学科の山田志麻講師を交えて、ロコモティブシンドロームとその予防法についてのディスカッションと質疑応答を行った。また、講演開始までの時間を利用し、口腔ケアの紹介、食事診断、骨密度測定等の食育イベントを実施した。

◆第 4 回：12 月 3 日(土)、　場所：本学 8101 教室、　一般参加者数：102 名

テーマ：『口腔粘膜疾患と口腔がんの見分け方』

内容：九州歯科大学引地尚子教授による歯周病および口腔がんに関する講演と、九州歯科大学口腔保健学科の学生による歯科に関するミニレクチャーが実施された。講演終了後には、本学栄養学科学生による『がん予防のための一汁一菜ランチ』の提供が行われた。また、歯科医師・歯科衛生士による Q&A コーナーを設け、参加者は講演開始までの時間に利用していた。

3)インシデントの有無：なし

[評価]

1)アウトカム評価

現在、本事業は 3 年目であり、参加者の約 8 割が北九州市内在住であることから、北九州市における食育活動としての開催は実現できたものと思われる。また、参加者数は開催回数とともに、漸次増加し、リピーター参加者が全体の半数以上を占めていることから、参加者の満足度の高さが、参加者増に結び付いたものと思われ、地域住民の方々に対する食育推進事業として浸透しつつあると考えられる。

2)プロセス評価

本事業は、教員と学生の協働による、地域住民を対象とした健康と食に関する支援活動であるとともに、将来を担う専門的知識を有する人材の養成・育成を目的としている。そのため、本事業への学生(主として 4 年生)の積極的参加を促しており、学生は食育イベント(食事診断、骨密度測定等)および講演後の食事提供(献立作成、検収、大量調理等)を担当する。学生が本事業の遂行に関わる一連の栄養士・管理栄養士業務等を実体験することは、自身の食生活および学習への取組の向上が認められており、社会貢献ならびに専門職としての意識を高めることに繋がるものと考える。

3)企画の妥当性と今後の課題

本事業は地域密着型の食育活動として、地域住民の食に対する関心を深め、かつ、生活習慣改善への動機づけを行うこと、また、学生の積極的参加を通して、専門職業人としての意識を高め、将来の地域における食育を担う人材を育成することを目指している。幸い、毎回コンスタントに 100 名を超える参加者希望者があり、本事業は北九州市における地域密着型の食育活動として定着しているものと思われる。また、本事業参加学生の食生活および学習に対する自己評価が高まったことから、公開講座への参加は、参加型学生教育として効果があることが示唆された。

今後の課題として、引き続き、北九州市における地域密着型の食育活動を具現化することを目標に、特に生活習慣病予防の面で具体的成果をあげて行きたいと考える。また、学生の積極的参加を促し、専門職業人としての人材養成にも繋げたいと考える。

[決算]

別紙に記載

[謝辞]

本事業の一部は、『2016 年度西南女学院大学共同研究費』により、実施されたものである。また、本公開講座にご参加いただきました地域住民の皆様ならびに多大なるご協力を賜りました西南女学院大学および九州歯科大学の教職員・学生の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

写真１：骨密度測定のようす(栄養学科学生)

写真２：血圧測定のようす(看護学科学生)

写真３：『でんでん虫』の歌にあわせて認知症予防体操(栄養学科学生)

【２０１６－２】

企画名：SAT システムを使った食事診断会

組織名：まなびと ESD ステーション～食から始まる健康プロジェクト～

申請者：境田靖子（保健福祉学部栄養学科）

【目的】北九州市食育に関する実態調査[1]（2012）によると、「朝食を毎日食べる人の割合」は 20 歳代男性で 48.6%，女性で 58.6%、「家庭で調理した夕食を食べる頻度」は 20 歳代男性で毎日が 28.6%，女性 38.1%とすべての世代の中で最も低く、他に「食育についての関心度」は 20 歳代男性で関心があると答えた者は 22.9%，女性で 33.8%と、若い世代の食に関する問題点が数多く抽出されている。一方で、北九州市は政令市の中でも、高齢化率が最も高いにも関わらず、男性の平均寿命 78.95 と健康寿命 77.34 の差は 1.61 年，女性の平均寿命 86.46 と健康寿命の差は 3.68 年と、全国平均男性 1.47，女性 3.23 に比べ長いことから[2]、高齢者の低栄養やロコモティブシンドロームなどによる QOL の低下が危惧されている。しかし、行政が行う健康教室や栄養相談は、もともと食や健康に高い興味を持つものしか参加せず、無関心期にある者が自分の食実態について把握し、改善意欲をもつ機会は少ない。以上のことから、市民が健康でいきいきとした生活を営み、活力のある社会を実現するために、適切な食事量や食事バランスといった正しい食知識の提供を行い、市民の健康増進に寄与することを目的とする。

【対象】（ESD ステーションの前を歩行中または ESD に活動に来ている）市民および大学生

【内容】

1）実施方法

①ESD ステーション前を通行中の市民にチラシを配布しながら声をかける。

②SAT システムの料理サンプルの中から、「自分が食べた料理（またはそれに近いもの）やこれから食べようと思っているもの」を選択し、トレーに 1 食分の食事を乗せる。

③トレーを SAT 診断の読み取り機に乗せ、食事を診断、パソコン表示および結果印刷。

④選択した食事内容の診断結果が出力された用紙を用いて、食事量についてスタッフ学生が説明。

※食事診断 SAT システム［(株) いわさき)］とは・・・エネルギーやたんぱく質などの栄養情報が搭載された IC タグのついた実物大の立体料理模型を選び、読み取り機に乗せると 、選択した料理に関する栄養価計算の結果が瞬時にパソコンに表示され、栄養バランスを星 5 つで 5 段階評価する。写真等の平面媒体と違い、具体的な量を示し、触ることができるため、選んだ食品の量的な把握や共有がしやすく、指導者にとっても対象者にとっても、わかりやすい栄養相談ツールである。

2）日時：2016 年 5 月 28 日（土），6 月 25 日（土），7 月 23 日（土），10 月 22 日（土），11 月 26 日（土）13 時～16 時（※12 月 27 日は中止した）

3）場所：まなびと ESD ステーション（北九州市小倉北区魚町 3 丁目 3-20 中屋ビル地下 1 階）

4）実施者：栄養学科 4 年　13 名

事前に学内で、6 パターン程度の食事診断の結果サンプルをもとに、ペアで結果解説のトレーニングを行い、本番に臨んだ。

5）参加者：食事診断を行った市民　合計 82 名

（18 歳未満 2 名，18～29 歳 15 名，30～49 歳 18 名，50～69 歳 36 名，70 歳以上 11 名）

6）インシデント：特記事項なし

【評価】

1）アウトカム評価：北九州市では「主食・主菜・副菜を組み合わせたバランスのよい夕食を摂取する者の割合」を 74.0%に（2017 年度目途）[2]，また「食育に関心がある者の割合（20 歳以上）」を 90%以上（2018 年度目途）[3] にすることを目標としており、今後の行政調査による評価が待たれるところである。また、事業従事者である学生は、管理栄養士として、対象者の声に耳を傾け、相手の生活を考慮した食生活の提案や行動変容の一助となる実践可能な改善策の提案をしていくために、対人コミュニケーションスキルを具備しなければならないが、本活動において一般市民の方々との交流により、カウンセリング能力の向上を図ることができたのではないかと考えられる（参考： 2015 年度授業評価アンケートより「コミュニケーション力や表現力を高めることができた」平均 4 点/5 点満点)。また、スタッフ学生の専門職就職率は過去 3 年平均 84.0%（25 名中 21 名であり、専門職種を目指す者としてのモチベーションアップにもつながっていると考えられる。

2）プロセス評価：本事業は 5 年目であるが、食事診断の参加者は 2013 年度 91 名，2014 年度 81 名，2015 年度 79 名，2016 年度 82 名と推移しており、年齢層も幅広く、目的にある食や健康に対し無関心な者が気楽に自己の食生活を振り返るきっかけ作りの場として活用していただけている。

3）企画の妥当性と今後の課題：本学は、北九州市立大学による大学間連携共同教育推進事業「まちなか ESD センターを核とした実践的人材育成」の連携校である。本事業は 2012 から 2016 年度までであるが、当該事業終了後も、本活動を継続的に展開していくことは、「看護・栄養・福祉の拠点」としての本学の存在意義を広く地域に示し、質の高い学生を輩出していく上で有意義である。今後は、個別説明時に受けた市民からの食や健康に関する質問の内容や、それに対しどのように回答したかなどの事例検討を各回終了時に行い、管理栄養士として身に付けるべき知識や能力の確認など振り返り学習を取り入れ、より実践力の高い人材育成を目指す。

【決算】大学間連携共同教育推進事業より支出（収入は ESD 関連事業一括のため算出不可能）

（支出）PC プリンターインク　45928 円
ポップホルダークリップ　108 円
旅費交通費　5920 円

【文献】

1）北九州市保健福祉局：平成 24 年北九州市食育に関する実態調査・調査結果について，p3，15，26，北九州市印刷物登録番号第 1210190F 号，2013 年

2）北九州市：北九州市健康づくり推進プラン，p11，86，北九州市印刷物登録番号第 1210148A 号，2013 年

3）北九州市：第二次北九州市食育推進計画，p74，北九州市印刷物登録番号第 1310147A 号，2014 年

図 1　食事診断 SAT システム

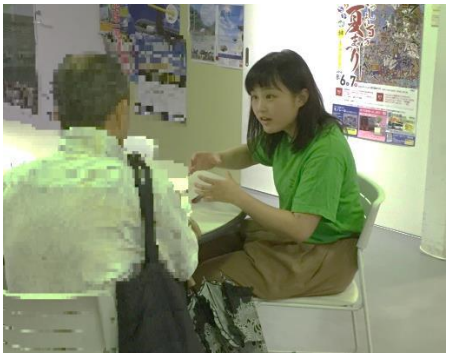
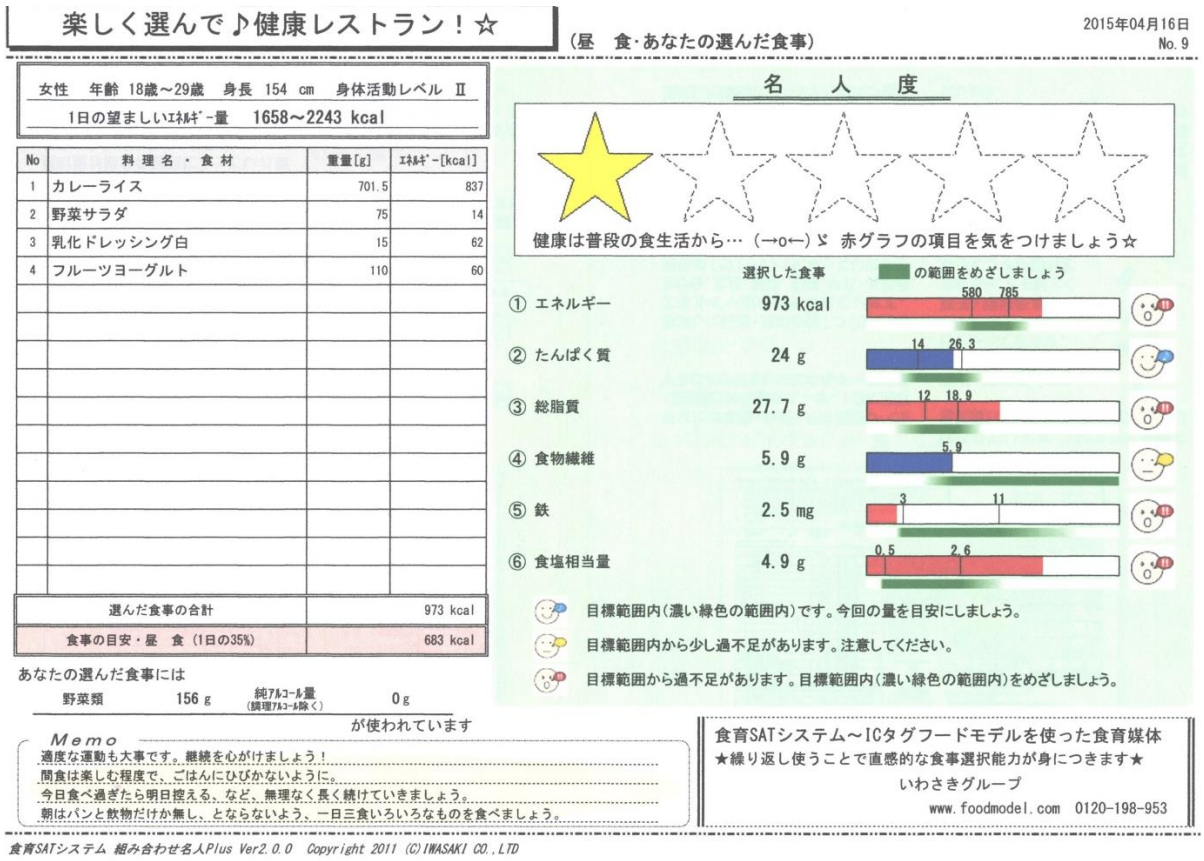


図 2　市民の方へ結果説明


楽しく選んで♪健康レストラン！☆

（昼　食・あなたの選んだ食事）

2015年04月16日
No. 9

女性　年齢 18歳～29歳　身長 154 cm　身体活動レベル Ⅱ
1日の望ましいｴﾈﾙｷﾞｰ量　1658～2243 kcal

No	料 理 名 ・ 食 材	重量[g]	ｴﾈﾙｷﾞｰ[kcal]
1	カレーライス	701.5	837
2	野菜サラダ	75	14
3	乳化ドレッシング白	15	62
4	フルーツヨーグルト	110	60

選んだ食事の合計	973 kcal
食事の目安・昼　食（1日の35%）	683 kcal

あなたの選んだ食事には
野菜類　156 g　純ｱﾙｺｰﾙ量（調理ｱﾙｺｰﾙ除く）　0 g
が使われています

Memo
適度な運動も大事です。継続を心がけましょう！
間食は楽しむ程度で、ごはんにひびかないように。
今日食べ過ぎたら明日控える、など、無理なく長く続けていきましょう。
朝はパンと飲物だけか無し、とならないよう、一日三食いろいろなものを食べましょう。

名　人　度

健康は普段の食生活から…（→o←）ﾒ 赤グラフの項目を気をつけましょう☆

	選択した食事	の範囲をめざしましょう
① エネルギー	973 kcal	580 785
② たんぱく質	24 g	14 26.3
③ 総脂質	27.7 g	12 18.9
④ 食物繊維	5.9 g	5.9
⑤ 鉄	2.5 mg	3 11
⑥ 食塩相当量	4.9 g	0.5 2.6

目標範囲内（濃い緑色の範囲内）です。今回の量を目安にしましょう。
目標範囲内から少し過不足があります。注意してください。
目標範囲から過不足があります。目標範囲内（濃い緑色の範囲内）をめざしましょう。

食育SATシステム～ICタグフードモデルを使った食育媒体
★繰り返し使うことで直感的な食事選択能力が身につきます★
いわさきグループ
www.foodmodel.com　0120-198-953

食育SATシステム 組み合わせ名人Plus Ver2.0.0　Copyright 2011 (C) IWASAKI CO.,LTD

図 3　　SAT システム診断画面

図 4　案内チラシ

【２０１６－３】

地域貢献活動報告書

① 基本情報

企画名　**近代化産業遺産（世界遺産）のマンガ教材（第２編）**

組織名　WILL (Women Innovation Launching Laboratory)

代表者　須藤秀夫（WILL 顧問）　末吉春香（WILL 代表、 報告発表者）

② 概要

目的：世界遺産登録された八幡製鐵所の操業を支えた若松の歴史的歩みを主要人物や石炭荷役（「ごんぞう」）の活躍などを通して描く。

対象者である市内外の小中学生に、地元の産業史の知識を得、考えて頂くこと。

参加する本学学生にとっては、地元の産業史を学ぶこと、関係する団体の方々（史実の指導をして頂いた旧古河鉱業ビルの若宮館長、2015 年度同様に監修をお願いする市の博物館学芸員の方など）との協働を通しての考え方や物事の進め方などについての学び、地域活性化に貢献する喜びなどを感じること。

対象　世界遺産となった産業施設と北九州の産業史に関心をもつ小中学生など
さらには市民一般（昨年度のように漫画ミュージアムでの展示となる場合）

内容　世界遺産マンガ第 2 編の制作。
マンガ教材として市内の小・中学校等に提供する。
なお、当初計画していたマンガを読んだ親子を対象としたバス・ツアーは、予算の関係から今回は実施しないこととした。

背景・経緯等：2015 年度、産業史マンガ教材（第 1 編）「漫画で学ぶ日本の産業発展物語 八幡製鉄所設立編」を制作した。
完成後、市内小学校、図書館などに贈呈した。東田第一高炉史跡広場に冊子を置いて頂いたり（北九州市市民文化スポーツ局文化企画課ご依頼）、市漫画ミュージアムで 2016 年 6 月 11 日～8 月 5 日常設展示をして頂いたりしたこともあり、市内の小学生ほか多数の市民の目に触れた。
なお、2016 年 3 月実施の親子向けバス・ツアーには 16 組 38 名の参加があった。1 グループにつき、人数により 2,000～4,000 円

実施日時・場所・実施内容

これまでの活動：

学生の打ち合わせ会で文献などを参考にストーリーを仕上げた。

11 月 29 日　　旧古河鉱業ビル若宮館長に若松の歴史をレクチャーして頂いた。
12 月 15 日　　若宮館長に史実確認をして頂いた。
12 月　　第 1 編の漫画制作をして頂いた卒業生に第 2 編の作画を依頼した。

今後の予定

３月中旬　　ラフ画完成。　これにせりふを付けていく。
３月中旬～下旬　史実確認
（旧古河鉱業若宮館長、北九州市立いのちのたび博物館）
4 月～5 月末　　本格的な漫画制作。　送付の準備
6 月上旬　　印刷
6 月末　　納品
7 月　　市内の小・中学校へ送付

参加者数　　学生 8 名　（史実の発掘、ストーリー作り、せりふ付け等）
WILL の卒業生 1 名（漫画執筆）

インシデント　　該当なし

評価　　アウトカム評価：　該当なし（まだ完成していないので）
プロセス評価：　若松の産業史の学び・掘り下げは大変興味深く、学生のやる気が出る。
企画の妥当性と今後の課題
第 1 編の実績と市民の声を聞いた経験から、第 2 編も意味ある制作であると考える。
課題は､今回できなかったバスツアー(第 1 編では 2016 年 3 月に実施)を、第 2 編の漫画テキストに関係して実施すること。資金調達ができることが必要になる。

決算　　未了　（マンガ教材が未完）

謝辞　　資金的支援を頂く北九州活性化協議会(KPEC)様、ご指導頂く若宮館長、そして漫画執筆して頂く卒業生(WILL の先輩)に心より感謝申し上げます。

文献　　斉藤泰嘉『佐藤慶太郎伝　東京府美術館を建てた石炭の神様』図書出版 石風社　2008 年
徳永博文 『日本の石炭産業遺産』　弦書房　2012 年
久門 守（監修）『北九州の今昔　上・下巻』　郷土出版社　　2010 年
玉井政雄『ごんぞう物語』オール日本社　1969 年
『広岡浅子の生涯』大同生命 HP より
http://kajimaya-asako.daido-life.co.jp/asako/

【２０１６－４】

地域貢献活動報告書

① 基本情報

企画名　若松活性化事業

組織名　WILL (Women Innovation Launching Laboratory)（地域貢献の学生団体）

代表者　須藤秀夫（WILL 顧問）　末吉春香（WILL 代表、　報告発表者）

② 概要

目的　多くの若者が若松区を訪れ活動の場とするよう促し、若松区が活性化することを目指す。

対象　地域活性化の恩恵を受ける若松区民

内容　学生は活性化に関する取材・調査を行い、提言（プレゼン）を行う。
イベントを実施する。

イベントは、「とっとこ　～素敵な瞬間を若松で～」というロゲイニング・ゲーム。ロゲイニング・ゲームとは、参加者が地図（スマホ使用）を片手にあらかじめ設定されたチェックポイントを制限時間内に多く回って写真を撮り得点を競うもの。ゲーム後、参加者は撮った写真を SNS で発信する。

主催は、次の構成員から成る若松ロゲイニング・ゲーム実行委員会：

西南女学院大学 WILL（企画・地図作成・当日運営等）
若松区役所（事務局）、　北九州市総務局情報政策部（IT 活用）
響灘緑地グリーンパーク、　株式会社ゼンリン
北九州商工会議所、　北九州観光協会

経緯等：　WILL は 2015 年度から若松区の文化的観光資源の探求を行い、2015 年 11 月には若松への福岡市地区の中高年者を対象としたバスツアーを企画、50 名の参加を得て実施した（学生はガイドを務めた）実績がある。その経緯もあり、今年度も若松区役所から連携して案件に取り組みたいとの申し出を頂いた。

実施日時・場所・実施内容

2016 年 6 月 23 日　若松区役所
小松真区長に挨拶
会議室にて打ち合わせ会合

8 月 12 日　　若松区役所にて打ち合わせ会議
8 月 23 日　　若松区役所にて打ち合わせ
9 月 21 日　　若松区役所にて打ち合わせ
10 月 14 日　　若松にてイベント（とっとこ）マップ掲載用写真撮影
10 月 18 日　　若松区役所と打ち合わせ
10 月 31 日　　本学 8 号館 5 階会議室にて　学生の打ち合わせ
11 月 7 日　　10:00 若松区役所にて打ち合わせ。イベント場所の下見
11 月 8 日　　本学会議室にて、学生打ち合わせ。イベント用のマップ作り
11 月 22 日　　黒崎にてプレゼン実施　　参加学生 2 名
11 月 23 日（祝）　午前 若松にてプレゼン実施　　参加学生 2 名
若者が活動するに当たって若松区が魅力ある場所であるためには、どういう策をとったらよいのか、女子大生目線で提言した。
2016 年 11 月 23 日（祝）　13:00-16:00　イベント「とっとこ」実施
参加学生　11 名
約 20 名の市民の参加があった。

インシデント　　なし

③ 評価

アウトカム評価　　イベントについては、20 名弱の参加者があった。
初回としては、まずまずの成果であった。

プロセス評価　　若松区に若者が来て活動しないという問題の背景要因を探り、調査・取材を通して解決策を見出し、イベント実施の提言につなげる活動を通して、自分たちの論理的展開力、社会観察力、コミュニケ―ション能力を向上させた。　区役所、ゼンリン、グリーンパーク、市民などとのやりとりを通して、社会との対応の在り方について学んだ。

企画の妥当性と今後の課題

第二回「とっとこ」について、若松区役所から再度連携の誘いを頂いたので、取り組んでいきたい。

④ 決算　　区の予算にて実施

⑤ 謝辞　　事務局を務めて下さった若松区役所の皆様、IT 活用・地図活用等についてご指導頂いた北九州市総務局情報政策部、ゼンリンとグリーンパークの皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

以上

【２０１６－５】

地域貢献活動報告書

① 基本情報

企画名　小倉の食文化ぬか炊きの広報活動

組織名　WILL (Women Innovation Launching Laboratory)（地域貢献の学生団体）

代表者　須藤秀夫（WILL 顧問）　末吉春香（WILL 代表、　報告発表者）

② 概要

目的　300 年ほどと言われる小倉の食文化ぬか炊きを全国発信することにより、北九州への来訪客増加を促し、活性化を図る。

対象　活性化の恩恵を受ける市の住民、売上げが上がる地元のぬか炊きおよびぬかの製造業者等、来訪観光客から恩恵を受ける地元の観光業界

内容　PR 部隊「**ぬか小町**」としての広報活動

イベントに向けての準備・当日の出演者へのサポート等

（北九州市産業経済局食の魅力・創造発信室からの協力依頼と連携による）

経緯等：　2015 年 11 月、「発酵ジャパン」および「日本ヌカ・オブ・ザ・イヤー2015」というイベントが実施され、北九州市役所産業経済局食の魅力創造・発信室からの依頼に応じて、本学科の学生は、準備・当日イベント進行の係ならびにＰＲ部隊「ぬか小町」として参画、教員・須藤も実行委員長として参画した。

今般、同室から 2016～2017 年度も協力してほしいとの申し出を受け、応諾した。

参加者数：　WILL の学生 11 名

実施内容・時期：

これまでの活動

2016 年 10 月 9 日　TGC(Tokyo Girls Collection)北九州にてケイタリング活動

11 月 4 日　北九州市主催「タウンミーティング　観光の街　北九州」（約 300 名の参加者）にて、PR 部隊「ぬか小町」がぬか料理を PR した。なお、このイベントでは、WILL の代表 1 名が「貴女へ贈るオトナ女子旅」パンフレットのプレゼンを行った。

11 月 22 日　食育・地産地消を展開している福岡県が主催した「福岡のおいしい幸せ　大晩餐会」（300 名超の参加者）にて、小倉の食文化ぬか料理の PR 部隊「ぬか小町」の学生 4 名が浴衣と番傘で北橋市長と共に舞台に登場、プレゼンと軽妙な

トークで会場を盛り上げた。

今後の活動

主たる活動として 2017 年 5 月上旬の連休中に行われる「発酵ジャパン in 九州&北九州　食の祭典」にて「ぬか小町」らが PR 活動を行う予定。

インシデント：　該当なし

③ 評価

アウトカム評価:　現状該当なし(5 月上旬の主たる活動がまだ為されていないため)

プロセス評価：

大きなイベントに参画することを通して、また、社会人（市の職員や業者等）との折衝を通して、学生は物事を進める段取り、有効な広報やコミュニケーションの手法・スキルなどを学んでいる。また、自身の適性・強味弱みなどの気づきを得ている。

企画の妥当性と今後の課題

上記目的があり、有意義なイベントであると思う。

課題は、ぬか炊きを全国的に認知してもらう上で更なる取り組みが必要であろうこと。

④ 決算

該当なし　（市の予算にて準備、実施）

⑤　謝辞

大きな活動の舞台を与えて頂き、また、ご指導頂き、北九州市役所食の魅力創造・発信室様に感謝申し上げます。

１．基本情報

① 企画名　「一緒にあそぼう」

② 団体名　ちゃれんじ

③ 代表者　福祉学科　山本　佳代子

２．概要

① 目的

障害のある子どもときょうだい、その家族を対象とし余暇活動支援を行う。活動ではさまざまなレクリエーション活動を通し、子どもたちが楽しく体を動かしながら多様な動きを身につけること、仲間と体験を共有し、仲間と一緒に遊ぶ楽しさを知ることを目的とする。

またスタッフとして参加する学生は、子どもたちとの関わりを通し、障害についての理解を深めること、場面に応じた声かけや関わり方を知ること、プログラムの企画や実践の方法について学ぶことを目的とする。

② 対象

障害のある子どもときょうだい、その家族。

③ 内容

体育館でのレクリエーション活動・水泳活動・休日を利用してのおでかけ（到津の森公園、金毘羅山ハイキング、交通公園・グリーンパークなど）・食育活動

④ 実施日時・場所・参加者数・実施内容

別紙資料

⑤ インシデントの有無

なし

３．評価

① アウトカム評価

・参加者について

保護者へのアンケート結果から、「特に楽しかった」活動は、プール活動や芋ほり、段ボールハウス作りなどのイベントが挙げられた。プール活動は、一般的にも子どもに好まれる活動であるが、【ちゃれんじ】では、子どもと学生１対１での態勢を整え活動しており、保護者も安心して見守りができることが人気の理由として挙げられる。また、段ボールハウス作りや芋ほりなどのイベント的な活動は、普段親子で参加できる場が少なくそのような機会を持つことが限られている家族にとって特に好まれている活動である。子どもの普段の様子を理解したスタッフと共に体験を共有できる場であり、保護者も気兼ねなく参加できることが好まれる理由として挙げられる。またイベントは土日に開催しており、普段は参加できない父親の参加が多いことも特徴である。

一方、もう一つの目的である活動を通して多様な動きを身につけることについては、どの程度その力をつけることができたか明確な評価はできなかった。

・学生について

はじめは、担当の子どもの安全を確保し、子どもの動きについていくことが主な関わりになるが、

回を重ね共に過ごす時間が増える 3，4 年生では、障害の特性を理解し、一人ひとりに合わせた関わりや、場面に応じた適切な声かけができるようになった。また、プログラムの企画と実践を通し、準備段階の大変さやスタッフ間の調整、実践の難しさを体験し、子どもたちが楽しく活動するために何ができるかということを考えることができた。他に、子どもだけでなく、保護者と接しコミュニケーションをとることで、保護者との関わり方や、障害のある子どもを育てるということについて考える機会を得ている。

② プロセス評価

・参加者について

参加しやすいよう、年間スケジュールを配布した。プールや各イベント時は、口頭で詳細を説明し、それぞれの状況に合わせ個別対応をすることで参加者が増えた。

・学生について

毎回活動終了後、各自記録を作成した。全員の記録をまとめ、返却し、全員が参加者について理解できるよう努めた。また活動時は、先輩と後輩ペアで子どもの担当ができるよう配置し、学生が子どもへの理解を深め、参加する時の不安の軽減につながるよう工夫した。その結果、講義や体調不良以外での欠席は少なかった。

・その他

子ども達が楽しみながら多様な動きを身につけられるよう、プログラムの前半（ダンス→歩く・飛ぶ・跳ねる・くぐるなどのサーキット）部分は、バリエーションを変え毎回実施し、飽きずに楽しく参加できるよう工夫した。

③ 企画の妥当性と今後の課題

・企画の妥当性について

企画は妥当であると考える。

・今後の課題

特に水泳活動で学生スタッフが不足している。水泳活動の回数を現状維持するためにも、スタッフの増加が課題である。

４．決算

予算なし

５．謝辞

活動に子どもたちを連れてきてくださり、学生が子どもたちと触れ合う時間を作ってくださる保護者に感謝致します。他に、助成元である【独立行政法人　国立青少年教育振興機構　子どもゆめ基金】、また今年度、食育活動に一緒に取り組んでくださり、活動の幅を広げてくださった栄養学科の山田志麻先生とそのゼミ学生、グリーンパークに感謝致します。

2016年度活動スケジュール

	実施日	時間	場所	参加者数	スタッフ数（福祉学科学生）				
					4年生	3年生	2年生	1年生	計
1	2016年4月7日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	10(子ども6)	6	8	1	0	15
2	2016年4月14日（木）	10:30から12:00	スタッフミーティング		6	9	1	0	16
3	2016年5月19日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	20（子ども12）	5	9	4	2	20
4	2016年6月2日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	15（子ども9）	4	9	4	1	18
5	2016年6月16日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	16（子ども10）	5	4	3	2	14
6	2016年6月25日（土）	9:30から11:30	大学第二体育館　段ボールハウス作り	21（子ども13）	2	7	1	1	11
7	2016年7月7日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	11（子ども6）	1	3	2	0	6
8	2016年7月14日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	11（子ども7）	1	4	1	0	6
9	2016年7月21日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	6（子ども4）	1	2	1	0	4
10	2016年8月18日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	9（子ども5）	1	4	0	0	5
11	2016年8月25日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	16（子ども10）	0	5	4	0	9
12	2016年9月1日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	13（子ども8）	2	1	4	0	7
13	2016年9月8日（木）	16：00から18:00	アレアスプール　　水泳活動	17（子ども10）	2	3	3	0	8
14	2016年9月29日（木）	10:30から12:00	スタッフミーティング		7	11	4	2	24
15	2016年10月6日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	17（子ども10）	6	4	4	1	15
16	2016年10月20日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	17（子ども10）	7	5	3	2	17
17	2016年11月6日（日）	12:00から15:30	グリーンパーク　いもほり	22（子ども10）	5	0	3	2	10
18	2016年11月17日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	19（子ども11）	7	5	3	1	16
19	2016年12月1日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	16（子ども10）	7	5	3	1	18
20	2016年12月8日（木）	10:30から12:00	スタッフミーティング		5	11	4	2	22
21	2017年1月22日（日）	9:00から14:00	大学調理室412　おいものおやつ調理・試食	23（子ども13）	3	5	0	0	8
22	2017年2月16日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	16(子ども9)	3	4	4	0	11
23	2017年3月2日（木）	16：00から18:00	大学第二体育館　レクリエーション活動	13（子ども8）	3	4	4	0	11
24	2017年3月16日（木）	16：00から18:00	交通公園	14（子ども８）	1	10	2	0	13

【２０１６－7】

地域貢献活動報告書

保健福祉学部 栄養学科

講師　山田志麻

企画名：地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動

組織名：北九州市立　浅生スポーツセンター　戸畑スポーツコミュニティ事業団
（株式会社オリエンタルコンサルタンツ）

代表者：北九州市立　浅生スポーツセンター　総括責任者　川本　卓史
西南女学院大学　保健福祉学部　栄養学科　講師　山田　志麻

その他の教員：福祉学科　稲木光晴教授、福祉学科　山本佳代子助教、栄養学科　石井愛子助手

背景及び目的：この活動は戸畑 D 街区スポーツ施設の指定管理者である株式会社オリエンタルコンサルタンツより、スポーツセンターを中心に食や健康に関する事業の要望がなされたことが、きっかけとなった。

これまで身体活動量の多い者や、運動をよく行っている者は、総死亡、虚血性心疾患、高血圧、糖尿病、肥満、骨粗鬆症、結腸がんなどの罹患率や死亡率が低く、また、身体活動や運動が、メンタルヘルスや生活の質の改善に効果をもたらすことが認められている。高齢者においても歩行などの日常生活における身体活動が、寝たきりや死亡を減少させる効果があることが示されている。

浅生スポーツセンターは、地域住民が気軽に利用できるスポーツ施設として有用であると考えられるが、これまでにスポーツ施設等では、運動と食事や栄養について気軽に相談できる窓口がなかったのが現状である。そのため、本事業では、地域住民が「栄養」や「食べ物」、「サプリメント」や「運動と食事」等につて相談ができるよう、栄養相談ブースを定期的に設置し、個人の健康管理や栄養の改善を図ることを目的とした。

意義：健康の維持増進を目的とした利用者（特に高齢者）を対象に、学生による簡易栄養相談を行うことで、高齢者の健康の維持増進を図り、食事や栄養の面でのサポートを行うことができる。また将来、健康保健分野の仕事に従事する学生にとっては、食事指導やコミュニケーションスキルを身につける貴重な経験となる。本事業は、教員と学生の協働による、地域住民を対象とした健康と食に関する支援活動である。

対象者：平日の浅生スポーツセンター利用者（主にシニアを対象とする）
※診断や測定結果の利用について説明を行い、同意を得られた方に行う。

実施予定：2017 年 3 月末日　平日の午前または午後（1 人当たり所要時間は 10～15 分程度）

実施場所：浅生スポーツセンター　エントランスホール

参加者数：1 クール 8～10 名

実施内容：ソフトを使用した簡易栄養診断および栄養相談による食生活の見直しを、体組成測定（InBody)、血色素測定（ASTRIM FIT）を利用したモニタリングにより、体組成分析（適正体重、筋肉量、脂肪量、肥満指数、部位別筋肉量や部位別脂肪量）や貧血チェックを行い、運動や日頃の活動に見合った食事の提案を行う。1 人当たり所要時間は 10～15 分程度とする。

配布資料：案内及び同意書、食事チェックシート、アドバイスシート、高齢者用アンケート、食事診断結果表、InBody 結果表など。

インシデントの有無とその対応：

アウトカム評価：

プロセス評価：

企画の妥当性と今後の課題：

- 学生の授業に支障のないスケジュール調整
- 最低月 2 回の実施
- 倫理申請書の提出
- 利用者の要望に見合った調理実習の検討

  株式会社オリエンタルコンサルタンツが管理する若松グリーンパークで使用しているキッチンカー等を利用した食のイベントなどを検討中。

浅生スポーツセンター利用者各位

西南女学院大学　保健福祉学部
栄養学科　山田志麻

簡易栄養診断のご案内

地域住民の健康の維持・増進を図るため、「栄養」や「食べ物」、「サプリメント」や「運動と食事」等について気軽に相談できる窓口として、管理栄養士を目指す学生による 5 分程度の問診できる栄養診断を行う「簡易栄養相談ブース」を定期的に設置することとなりました。

つきましては、簡易栄養診断を希望される方は下記の内容をご確認の上、ご同意書いただきますようお願いいたします。

簡易栄養診断及びアンケートの同意書

本日は、「西南女学院大学の簡易栄養相談」にご参加いただき、ありがとうございます。栄養相談窓口の今後の資料として、アンケートのご協力をお願いいたします。

このアンケートはあくまで、自由意志によるもので、アンケートを記入しなくても、皆様に何の不利益もありません。また、個人情報は厳重に管理致します。

・参加にあたって健康状態は心身ともに万全で支障ありません。
・アンケートの内容を学会や研究会で発表することを承諾いたします。
（個人情報は一切公表いたしません。）
・栄養相談の風景（顔がうつる事がないように配慮いたします)、記事をホームページ等に掲載することを承諾します。

上記の説明を行った者

西南女学院大学　所属　保健福祉学部栄養学科　氏名　山田志麻　印
自署の場合は押印不要

研究責任者：西南女学院大学　保健福祉学部　栄養学科　山田志麻
電話番号（093）583-5719
苦情処理窓口：西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部　倫理審査委員長
連絡先電話番号：(093) 583-5130（西南女学院大学　庶務課）

アンケート

お手数ですが、以下のアンケートにご協力くださいますよう、お願いいたします。

氏　名		年　齢	歳	性　別	男　・　女
家族構成	1.1 人暮らし　2.配偶者と 2 人　3.家族と同居				
起床時間	時　分				
就寝時間	時　分				
惣菜やお弁当の利用	1.週に 1,2 回	2.週に 3,4 回	3.週に 5,6 回	4.全く利用しない	
外食の利用	1.週に 1,2 回	2.週に 3,4 回	3.週に 5,6 回	4.全く利用しない	
食材の調達者	1.本人　2.配偶者　3.家族　4.宅配サービス 5.その他（　　）				
調理担当者	1.本人　2.配偶者　3.家族 4.その他（　　）				

栄養診断を受けて、あてはまるものにすべて○を記入ください。

① 食べ過ぎる食品や不足している食品がわかった。
② 必要なエネルギー量がわかった。
③ 必要な栄養素について理解できた。
④ お酒（アルコール）について理解できた。
⑤ お菓子や甘いものについて理解できた。
⑥ 油の摂り方や種類について理解できた。
⑦ 塩分の摂り過ぎや減塩ついて理解できた。
⑧ 自分の体組成について理解できた。
⑨ 貧血やその改善方法について理解できた。

その他、ご意見、ご感想などご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。
西南女学院大学　栄養学科

【２０１６－８】

１．企画名　　だいすき　にっぽん
子どもたちに伝えたい「食」と「あそび」と「ことば」

２．主催者名　　学校法人　西南女学院　『だいすき　にっぽん』実行委員会

３．企画代表者　　西南女学院大学保健福祉学部　保健福祉学部長　谷川弘治

４．概要

（１）活動の経緯と特色

2014 年度より「子どもゆめ基金」の助成を受けて、地域の小学生とその家族が日本の伝統文化を体験的に学べる行事を開催しています。日本の文化を熟知して、他の国の文化も受け入れることができる真の国際人になってほしい、そのような思いで企画しました。日本の四季折々の慣習や年中行事には、昔の人々の「智恵」「技」「願い」が込められています。この想いを大切に、大学・大学短期大学部の教職員と地域の職人から次代の社会を担う大学生・短大生へ、そして小学生とその家族へ、バトンをつなげていく活動です。その活動は、以下の特色を有しています。

①　プログラム構成

受付で学生手作りの名札を受け取った後、アイスブレイクの要素を含んだ**「ことばあそび」**で学生とのふれあいを体験します。その後**「食」**で栄養学科の学生と一緒に調理実習をおこないます。お食事の後、**「あそび」**を楽しみ、終わりの会でプログラムが終了します。

②　学部学科の枠を超えた活動

今年度参加学科は、大学保健福祉学部福祉学科・栄養学科、大学人文学部英語学科、短期大学部保育科。

③　教職員・学生が協働

教員主導ではなく、教職員・学生関わる者すべてが同等な立場として主体的に活動しています。そのため、運営会議にも学生が参加し、企画説明等をおこないます。

④　おもてなしの心を大切に

プログラムそのものだけでなく、さりげない心配りこそ大切に運営しています。

⑤　共に学びあうこと

プログラムを企画運営していく中で、学生と教職員は互いに学びあう姿勢を保っています。また、行事の当日は、子ども達や保護者からも多くを教えてもらっているという感謝の気持ちを忘れずに接します。

（２）対象者と開催場所

募集人数は、小学生 30 名程度。開催場所は、西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

（３）内容および参加人数

開催日	実施内容	参加者人数
第 1 回（6/25）	「ことばあそび」“雨”に関することば 「食」和菓子と唐菓子 「あそび」ニュージーランドの原住民のあそび 日本のめんこ	子ども　21 名 保護者　12 名
第 2 回（8/24）	「ことばあそび」夏野菜の数の数え方	子ども　12 名

	「食」北九州産の野菜を使った精進料理 「あそび」かるたあそびと風鈴作り	保護者　8 名
第 3 回（11/19）	「ことばあそび」ことわざのカルタあそび 「食」そばうち 「あそび」運動会	子ども　22 名 保護者　13 名
第 4 回（12/17）	「ことばあそび」十二支の由来と干支の読み方 「食」九州各地の郷土料理（バイキング式） 「あそび」お正月あそび	子ども　24 名 保護者　14 名
第 5 回（2/25）	「ことばあそび」正月・節分・ひな祭りの双六 「食」恵方巻き 「あそび」ドイツの鍋たたき 日本の紙相撲	子ども　21 名 保護者　14 名

５．評価

① 振り返り会:当日の VTR を見ながら学生･教員で振り返りを行い､次回の改善につなげます。

② アンケート:「保護者」「学生」「教職員」各々アンケートを実施して次回へ反映させます。

【子ども・保護者】「家庭では経験できないことができる」「ゲームではないあそびもするようになった」　などの感想が寄せられました。

【学生】・最初は就活になる、先生に勧められたからなどの理由で始めたが、活動を通して、「企画を立てる力がついた」「スケジュール管理ができるようになった」「日本の知らないことを知ることができて好きになった」などの変化が見られました。

６．決算

助成金　￥237,600、参加費　１名￥300

＊第 5 回が 2 月 25 日であったため、決算はまだできていません。

７．今後の課題

・開催日が、学生の補講日と重なるため、ボランティア動員に毎回苦労します。→開催日の検討

・学生たちが準備をする場所を現在、教員の研究室でおこなっていますが、教員が実習などで不在の時、不便さを感じています。→学生の活動場所の確保

８．御礼

この会が、毎回盛会で終えることができるのは、学生たちの入念な準備のおかげです。授業、課題、実習、などの合間に手を抜くことなく活動してくれた学生たちに心より感謝いたしております。また、お手伝いくださった先生方にも御礼申し上げます。ご担当してくださいました先生方の質の高さには感服いたしました。

そして、何より、この会に参加してくださり、「次も来るね！楽しみ！」と言ってくださる子ども達や保護者の皆様に感謝申し上げます。

９．添付資料

・チラシ

・写真資料

・発表会の配布資料

以上

だいすき　にっぽん

添付資料

↓開催案内チラシ（表）

↓開催案内チラシ（裏）

↑受付の様子

↑１２月開催時の手作り名札

↑ことばあそび↑

↑調理の様子

あそびの様子→

【２０１６－９】

地域貢献活動報告書

① 基本情報

企画名：京築のヒノキと暮らすプロジェクト

目　的：建築資材としての木材需要が低迷している中、京築地域で昔から多く植栽されてきたヒノキを中心とした京築の木材の利用を進め、木材利用に伴う森林の伐採を促し、健全な森林のサイクルの回復、さらには京築地区の地域活性化の起爆剤となることを目指す。生活に潤いを与える家具や内装材としての利用を喚起するために市場調査やデザインの検討を行うことにより新たな木材利用の提案を行うことを目的とする。

組織名：人文学部観光文化学科高橋ゼミ

責任者：高橋幸夫

② 概要

内容　：

１）プロジェクトの構成メンバー

（行政）福岡県行橋農林事務所林業農林課、行橋市、豊前市、苅田町、みやこ町、上毛町、築城町、吉富町

（生産現場）京築森林組合、豊築森林組合、豊築森林組合木材流通センター

（制作現場）京築ブランド館、Made in KOGE 他木工家具制作者

（教育現場）西日本工業大学デザイン学部建築学科石垣ゼミ、本学観光文化学科高橋ゼミ

２）活動

消費者アンケートや生産者・販売者インタビューなどのマーケティング調査結果や学生のアイディアをもとに、良質な京築の木材を活かした家具、内装、木製品としてのデザイン提案や製品開発、製品の販路開拓も行う。また、プロジェクトの活動状況をマスメディア、SNS などを活用した情報発信を行うことにより、京築ヒノキ他の木材への社会的関心の醸成と京築地域の活性化への貢献を活動の柱とする。

３）実施日時、場所、内容

１．マーケティングリサーチ（街頭アンケート・企業インタビュー）

期間：2015 年 10 月～2016 年 3 月

２．デザインコンペティション（３回実施）

期間：2016 年 5 月～10 月

３．デザイン展示（ちくらす工房）

期間：2016 年 2 月 22 日-28 日　井筒屋新館

４．イベント実施（京築魅力満祭２DAYS）

期間：2017 年 2 月 25、26 日　クロスロード（市道船場町 1 号線）

４）インシデント　なし

③ 評価

2017 年度も継続するプロジェクトであるため最終的な目的の達成と評価はできないが、2015 年度、2016 年度評価としては、以下の通り。

アンケートなどマーケティング調査、イベント実施などの活動を通じて京築のヒノキの PR に多少なりとも貢献ができた。また、この活動によって本学学生は社会・経済およびビジネスの仕組みを理解するとともに社会的課題に対する問題意識の醸成に繋がった。

このプロジェクトが西日本工業大学デザイン学部建築学科学生との連携活動であるため、様々な気づきと刺激を得ることができた。

④ 決算

交通費ほか経費については福岡県行橋農林事務所、京築地区森林組合など団体が助成した。

⑤ 謝辞

本プロジェクトを主導いただいた福岡県行橋農林事務所様はじめとした京築地区行政・森林組合等団体の皆様、常に本学学生に気づきと刺激を与えていただきました西日本工業大学の教員、学生の皆様、ちくらす関連 PR イベント開催に際し学生に温かいご指導をいただきました井筒屋営業政策室の皆様および公共空間リソース利活用勉強会の皆様、そして本プロジェクトの取材と様々なご示唆をいただきました西日本新聞社北九州本社様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

本プロジェクトは 2017 年度も継続致します。引き続きのご指導をお願い申し上げます。

2015年10月1日　西日本新聞朝刊　通し版　社会面

京築ヒノキ家具 学生とタッグ

若者目線で調査、デザイン

若者世代への普及に向け新商品の開発が始まる「京築ヒノキ」などの木材＝福岡県上毛町の豊築森林組合木材流通センター（福岡県行橋農林事務所提供）

行橋など2市5町と西南女・西日本工大

福岡県行橋市や豊前市など京築地方の2市5町は、北九州・京築地方の2大学の学生と連携して、特産の「京築ヒノキ」を使い、女性や若者が好む家具や雑貨の開発に乗り出す。西南女学院大（北九州市小倉北区）がコンセプトづくりや市場調査を、デザインは西日本工業大（同県苅田町）の学生が担当。家具職人が製作し、県内の家具店で販売する計画だ。

京築ヒノキは、木の色合いの美しさが特長で、同地方では1972年に「京築地区森林・林業推進協議会」（会長・坪根秀介上毛町長）を設立し、利用促進を図ってきた。しかし、住宅の建築様式の変化で木材需要は減少。安価な海外産材の流通でヒノキ材の市場価格も20年前と比べ4分の1に落ち込んでいる。

こうした苦境を打開するため、協議会は女性や若いカップルをターゲットに家具の好みを調査して生産に生かす作戦を発案。商品に若者のセンスを取り入れるため、地元の2大学に協力を要請した。

計画では、西南女学院大人文学部の高橋幸未准教授のゼミ生約20人が、たんすやいすなどの家具の市場調査を担当。結果に基づいて西日本工業大デザイン学部の岩垣新准教授のゼミ生約10人がデザインし、苅田町や豊前市の手作り家具店の職人が製作する。将来的には県内百貨店での販売も目指す。

3日には学生たちが"ヒノキの山"を視察予定。協議会事務局の県行橋農林事務所林業振興課の佐藤晴一普及係長は「若者のセンスを商品製作に生かして、京築地方の林業の活性化に役立てたい」と意気込む。

同課によると、京築地方の森林面積は約2万8千㌶で、そのうちヒノキの面積（国有林を除く）は約1万1千㌶。（佐伯浩之）

2015年10月4日　西日本新聞朝刊　北九州京築版

西日本新聞　2015年(平成27年)10月4日　日曜日　北九州版　24

北九州 京築

上毛

京築の木材で好みの家具作り

学生ら伐採現場視察

西南女学院大と西日本工大

ヒノキなどの伐採現場を視察する大学生たち

京築地方のヒノキやスギを使い、若者が好む家具づくりの企画を担当する西南女学院大（小倉北区）と西日本工業大（苅田町）の学生ら約20人が3日、上毛町の伐採現場などを視察し、初めての会議を開いた。

企画は、京築2市5町でつくる「京築地区森林・林業推進協議会」の事業で、若者や女性の視点を家具などの生産に生かし、林業の再生を目指すことが目的。市場調査は西南女学院大、調査結果を受けた製品デザインは西日本工業大の学生がそれぞれ担当する。

伐採現場では、企画に協力する豊築森林組合東部支所（豊前市）の宮元隆弘支所長(42)が現場の状況や山の状態などを解説。学生らは、作業員2人がヒノキとスギを1本ずつ伐採し、運び出す作業を見学した。

見学後、企画の事務局の県行橋農林事務所（行橋市）でミーティング。「京築のヒノキやスギの知名度を上げることが必要」「ヒノキの質感や香りを伝えることができる製品づくりが大切」などの意見が出た。西南女学院大3年の村上真由さん(20)は「ヒノキやスギなどの素材やにおいを知ることができた。今後の調査に生かしたい」と話した。（佐伯浩之）

小倉北

ギネス挑戦前に

焼うどん

北九州のご当地グルメ「小倉焼うどん」でギネス世界記録に挑戦するイベントを前に、小倉北区のリバ

慣れない手つきで焼う

ボランティアの男性

北九州本社

〒802−8558

小倉北区堺町1−2−16

十八銀行第一生命共同

ビル4Ｆ

093（482）2601

FAX（531）2014

2015年10月23日　西日本新聞朝刊　北九州京築版

西日本新聞　2015年（平成27年）10月23日　金曜日　北九州版　22

京築のヒノキと暮らすプロジェクト

学生の企画 本格化へ

京築地方のヒノキなどを使い、若者が好む家具造りの企画を担当する西南女学院大（小倉北区）と西日本工業大（苅田町）の学生ら約20人が21日夜、小倉北区内で会議を開き、事業名を「京築のヒノキと暮らすプロジェクト」と決めた。今後、定期的に会議を開き、企画が動きだす。

企画は、京築2市5町でつくる「京築地区森林・林業推進協議会」の事業で、若者や女性の視点を木工製品の生産に生かし、林業再生を図ることが目的。市場調査は西南女学院大、調査結果を受けた製品デザインは西日本工業大の学生がそれぞれ担当する。

プロジェクト名は両大生が案を持ち寄り決定。全国ブランドの京築ヒノキを生活に取り入れる事業にしたいとの思いが込められた。

会議では、西南女学院大の高橋幸夫准教授のゼミ生らが11、12日に福岡市植物園（同市中央区）であったイベント「ウッドフェスタ2015福岡」で、木製品の購入先など5項目のアンケートを実施し、122人から得た調査結果を報告。このうち「どんな木製品を購入したいか」の問いでは、ダイニングテーブルやいす、子ども用のおもちゃ、本棚が上位を占めたことが分かった。

同協議会事務局の県行橋農林事務所林業振興課（行橋市）の佐藤龍一普及係長は「学生の自主的な活動で事業を軌道に乗せてほしい」と話している。（佐伯浩之）

山田緑地が開園20周年

25日に記念コンサート

小倉北区山田町の自然公園「山田緑地」が今年で開園から丸20年を迎えた。弾薬庫だった戦前の姿からは打って変わり、現在は親子連れや登山初心者などの憩いの場となっている。25日には記念のコンサートイベントを行う。

同緑地によると、1941年から旧日本軍の弾薬庫として使われ、戦後は米軍に接収され72年に全面返還された。95年5月の開園まで半世紀にわたって人の出入りが制限されたことから、手つかずの山野が残る。

年間の利用者数は開園当初の10万人より減ったものの、近年は7万人ほどで推移。敷地は140ヘクタールあり、4コースある自然観察路の散策やバードウオッチング、2ヘクタールある芝生の大広場＝写真＝でボール遊びなどができる。

北九州 京築

北九州本社
〒802－8558
小倉北区紺屋町1－2－16
十八銀行第一生命共同ビル4F
093（482）2601
FAX（531）2014

未来の夢
藤木小6年
清水（しみず）　竣介（しゅんすけ）くん
柔道の先生
ぼくの得意な技のはらい腰を教えたいからです。
（若松区）

2015年12月8日　西日本新聞朝刊　北九州京築版

京築ヒノキ 商品開発本格化

京築ヒノキを使った若い世代が好む家具などの商品開発プロジェクトに取り組む西日本工業大（苅田町）と西南女学院大（小倉北区）の学生が、今月から活動を本格化させている。学生たちは開発実現に向け、一歩一歩前進を図っており、関係者は期待を寄せている。（佐伯浩之）

西日本工業大生

将来の展示場 民家を改修へ

行橋市で現地調査

西日本工業大デザイン学部建築学科の学生4人は4日、開発した作品を展示する行橋市内の民家のリフォームに向けた実測調査を現地で行った。

学生は石垣克准教授のゼミ生ら。民家は同大職員の西村陽司さんが、現在誰も住んでいない妻の実家（同市南大橋4丁目、築約40年）を提供した。

西村さんは7年後にこの実家に住む予定で、学生は西村さん家族の要望を取り入れたうえで住宅改修を行うという。改修に必要な木材は、プロジェクトを統括する「京築地区森林・林業推進協議会」が京築ヒノキを提供する予定だ。

商品に関するインタビューをする西南女学院大の学生たち

西南女学院大生

「若者が買う家具は」

雑貨店訪問 助言受ける

西南女学院大人文学部観光文化学科の3年生4人が6日、福岡市中央区渡辺通の雑貨店「天神ロフト」を訪ね、現場の責任者から商品開発に関するアドバイスを受けた。

4人は高橋幸夫准教授のゼミ生。京築ヒノキを使った家具開発では、若い世代が購入したくなる商品を市場調査し、デザインを担当する西日本工業大学生に提案するのが役割だ。

4人は、天神ロフトの野村純館長と黒田旭企画担当課長に企画の趣旨とこれまでの活動を説明。学生は2人から「若者に受ける商品は見た目で引きつける必要がある」などの助言を受けたという。

ゼミ生の1人(21)は「興味深い話だった。西日本工大の学生にいい提案できるようにしたい」と話していた。

高橋ゼミのほかの学生も8日に小倉北区の家具専門店でインタビューを行い、商品開発に向けたヒントを得る。

2016年4月27日西日本新聞朝刊　北九州京築版

京築ヒノキで商品開発

西南女学院大と西日本工大がプロジェクト

京築地方のヒノキを使って若い世代が好む家具などの商品開発プロジェクトに取り組む西南女学院大（小倉北区）と西日本工大（苅田町）の学生約20人が26日、小倉北区の同工大地域連携センターで、本年度の活動方針を決める会議を開いた。西南女学院大が考えた商品コンセプトを、西日本工大生がデザインして、本年度末までに両大のブランド商品を開発、発表することを申し合わせた。

プロジェクトは知名度の高い京築ヒノキの利用促進を目的に、昨年度スタート。西南女学院大は福岡市や北九州市で、消費者が必要としている木材製品などの市場調査を実施した。

この日の会議では、調査を踏まえ、西南女学院大人文学部の高橋淳夫准教授のゼミ生が「オンナ・くすぐる・おいしさ∞」をテーマに、若い女性（25～30歳）をターゲットにした木材品ギフトのデザインを西日本工大に依頼した。

これに対し同工大側は、来月28日までに、デザイン学部の石垣充准教授の研究室に所属する学生12人がそれぞれ1作をデザインし、両大で検討を重ねて製作する作品を絞り込むことにした。本年度末までに作品の発表機会を持ちたいとしている。

一方、西日本工大生からも独自で考えた写真立て、ドアノブなどの商品開発案の説明もあり、実現性を探った。（佐伯浩之）

あすから勝山公園で ドイツビール楽しむ オクトーバーフェスト

ドイツビールを楽しむ「小倉オクトーバーフェスト2016」が28日から、小倉北区城内の勝山公園で始まる。初夏のフェストは2014年にスタート。実行委は今回、5月8日までの期間中、6万人の来場を見込んでいる。会場には熊本地震の被災者のための募

北九州 京築

北九州本社
〒802-8558
小倉北区紺屋町1-2-16
十八銀行第一生命共同ビル4F
093（482）2601
FAX（531）2014

2016年8月16日　西日本新聞朝刊　北九州京築版

京築ヒノキ製品企画　すくすく

学生らがデザインコンペ

本年度末にも試作品発表

京築地方のヒノキを使って若い世代が好む家具などの商品開発に取り組む西南女学院大（小倉北区）と西日本工業大（苅田町）の学生の活動が熱を帯びている。西南女学院大生の設定したテーマに沿って西日本工業大生が手掛けた商品について審査を繰り返し、本年度末を目標に試作品などを発表する方針だ。（佐伯浩之）

吉富町内で今月9日に開かれた商品デザインコンペは、ビジネスマンの男性が使う製品がテーマ。西日本工業大生12人がそれぞれ約1カ月かけ名刺入れ、万年筆など12品を提案。西南女学院大生10人が審査した。

審査では、各商品に対し「着眼点はいいが、改良が必要だ」「シンプルで実現性が高い」など意見が白熱。作品のうち高評価を受けたのが「ヒノキノートカバー」だった。ノートや鉛筆、名刺入れを収納できるバインダーだ。提案した河内雅基さんは「実現性とビジネスシーンで使える商品を考えたら、バインダーだった」と話した。

◆　◆

プロジェクトは、京築2市5町でつくる「京築地区森林・林業推進協議会」の事業で昨年秋から開始。両大生の感性を生かし、20～30歳代が求める木工製品を開発して、林業再生を図ることが目的だ。

西南女学院大の高橋幸夫准教授のゼミ生は市場調査を担当。これまでに、福岡市で木製品の購入先などのアンケートを実施した。一方、西日本工業大は石垣充准教授の研究室の学生が西南女学院大のアンケート結果を受け商品開発を担う一方、行橋市内にある西日本工業大職員の縁者の民家を改修し、開発商品の展示場とする。

両大は10月上旬にも、若い世代の家族をターゲットにした「人と共に成長する家具」をテーマにコンペを開く計画。今回のコンペで選ばれた作品を加え、工芸作家に作品の改良などを依頼するという。同協議会事務局の高橋隆夫・県行橋農林事務所林業振興課普及係長は「来年度には製品を完成できるように頑張ってほしい」と期待している。

西南女学院大生らの前で作品を発表する西日本工業大の学生＝9日、吉富町

北九州 京築

北九州本社
〒802-8558
小倉北区紺屋町1-2-16
十八銀行第一生命共同ビル4F
093（482）2601
FAX（531）2014

西日本新聞北九州本社のフェイスブック（FB）ページを開設しました。皆さんの声をお待ちしています。アドレスは https://www.facebook.com/nishinippon.kitaq/

2017年2月2日　西日本新聞朝刊　北九州京築版

西日本新聞　2017年(平成29年)2月2日　木曜日　北九州版　26

京築産ヒノキの家具 若い世代へ

商品コンペ作品展示

22日から

西南女学院大と西日本工業大

小倉北

京築地方産のヒノキを使い、若い世代が好む家具などの商品開発プロジェクトに取り組んでいる西南女学院大（小倉北区）と西日本工業大（苅田町）の学生たちが22～28日、小倉北区の小倉井筒屋で、これまで手がけた作品を展示する。2016年度の活動の集大成で、会場では作品のアンケートも実施し今後の活動に役立てる。

商品開発は西南女学院大がテーマを設定し、西日本工業大が作品を製作、それを西南女学院大が審査するコンペを昨年3回実施。箱やノートカバー、名刺入れなど7作品が選ばれた。そのうち3作品は、小倉南区と上毛町の家具作家が、学生たちの作品を基に製作を請け負い、工夫すべき点などを洗い出してきた。

22日開幕の展示会は、京築地方の森林資源の利用・普及や活動PRを目的に井筒屋新館1階で開催。家具作家が受注した作品などを展示する予定だ。期間中は両大生らが常駐し、来場者に作品の感想や問題点などのアンケートを行うという。寄せられた意見を元に新年度は作品を改良し商品化を目指す。25、26日には同店で京築地方の産物などをそろえた物産展を開くこ

西南女学院大生らの前で作品を説明する西日本工業大の学生＝昨年8月、苅田町

北九州 京築

北九州本社
〒802－8558
小倉北区堺町1－2－16
十八銀行第一生命共同ビル4F
093（482）2601
FAX（531）2014

2016年2月25日　西日本新聞朝刊　北九州京築版

ライブがあり、約100人が聴き惚れた。

当てが外れた催しも。黒崎中央公園（八幡西区）の「かき小屋＆屋台村」も3時に営業を始めたが、お客が集まり始めたのは6時ごろから。主催の黒崎商店街組合事務局は「地元企業の社員がもっと来ると思っていた」と話していた。

（井川知美、金田達依、中原岳、清水恵美子）

京築産ヒノキ使い 学生の試作品展示

28日まで小倉井筒屋

京築産ヒノキを使った商品開発に取り組む西南女学院大（小倉北区）と西日本工業大（苅田町、同区）の学生たちが携わった試作品などの展示会が、小倉井筒屋新館（同区）で開かれている＝写真。28日まで。

地域の森林資源利用普及を目的に産学官でつくるプロジェクトの一環。マーケティング専攻の西南女学院大生が提案したテーマに沿い、西工大生が商品を考案。地元の家具作家が制作し評価が高かったノートカバーや名刺入れ、椅子などを展示している。

西南女学院大2年の外園晴香さん(20)は「おしゃれな小物を手に取ることで、京築地域のヒノキの魅力に気付いてほしい」。25、26日には京築地区の農産品販売もある。

2017年2月28日　西日本新聞朝刊　筑豊版

筑豊ニュース

京築産ヒノキ商品 試作品などを展示

小倉井筒屋新館

京築産ヒノキを使った商品開発に取り組む西南女学院大（北九州市小倉北区）と西日本工業大（苅田町、同区）の学生たちが携わった試作品などの展示会が、小倉井筒屋新館（同区）で開かれている。28日まで。

地域の森林資源利用普及を目的に同学院でつくるプロジェクトの一環。マーケティング専攻の西南女学院大生が提案したテーマに沿い、西工大生が商品を考案。地元の家具作家が制作し、評価が高かったブートカバーや名刺入れ、椅子などを展示している。

【２０１６-１０】

企画名：阿蘇カルデラ復興支援造成業務
実施組織：八尋春海ゼミ 3 年生
代表：八尋春海
学生責任者：荒木千尋
目的：震災で打撃を受けた阿蘇市（阿蘇田園空間博物館）の観光復興のためにツアーを考えます。
対象：阿蘇市内で新たな観光資源となるもの
内容：国の補助事業として阿蘇市の依頼を受け、阿蘇市の魅力を女子大生目線で発見・創造し、それを活かして具体的なツアーとして組み立てました。西南女学院大学が日帰りのツアー、阪南大学が宿泊を伴うツアーを検討しました。
実施日時：2016 年 12 月～2017 年 3 月
場所：阿蘇市内
参加者数：八尋春海ゼミ 3 年生 9 名と八尋春海
実施内容：以下のように進めました
12 月上旬　ゼミ内で阿蘇市について調査し、仮のツアープランを作成しました。
12 月下旬　阿蘇市に出向き、阿蘇田園空間博物館のスタッフと打ち合わせを行い、仮のツアープランの観光スポットの現地調査をしました。
1 月上旬　阿蘇市での打ち合わせと現地調査の結果をゼミに持ち帰り、ツアープランの練り直しをしました。
1 月中旬　阿蘇市に二度目の訪問をし、阿蘇田園空間博物館のスタッフ、阿蘇市の職員、阿蘇市の観光ボランティアと意見交換をし、それを参考にして、現地調査をしました。
1 月下旬　二度目の阿蘇市訪問の結果を基に、ツアープランの修正をしました。
2 月上旬　三度目の阿蘇市の訪問をし、ツアーパンフレットに使う写真撮影をしました。
2 月中旬　ツアープランのまとめをしました。

結果：3 月までに完成する予定だったパンフは順調に完成しそうです。ただ、アイデアとして、多くのプランを提案し、まだ現地で調整が出来ていないものについては、継続して検討することになりました。3 月をもって中締めとしますが。これまで事故もなく、無事に終わることができました。
決算：交通費と宿泊費の全額、食費の大半は、学生の負担がなかったため、調査に専念することができたようです。

プランの概要（１～２は完成、３～５は関係者との調整が必要）

１　阿蘇らしい衣装を着て記念撮影をするツアー
阿蘇山火口付近（阿蘇火山博物館の協力）：
　火山学者専用のヘルメットと防毒マスクを着用して､火口周辺をガイド付きで散策する。
外輪山の草原（エルパティオ牧場の協力）：
　カウボーイの恰好をして、馬に乗る。
内牧温泉地区（阿蘇温泉観光組合の協力）：
　浴衣を着て、阿蘇五岳をバックにそぞろ歩く。

２　ペット（犬）を同行するツアー
JR 阿蘇駅のホームにあるクロの犬小屋をスタート地点とする。途中、年の神水源で犬の水分補給をする。スタートから 40 分で旅館小笠原に到着する。ここでドッグラン（夏場は犬専用プールで遊ぶ）をし、犬と一緒に食事、ベッドで一緒に眠る。JR 阿蘇駅に戻り、道の駅阿蘇で犬用の高級餌を購入する。阿蘇神社門前町に車で移動し、犬グッズを売っている店を訪問する。

３　恋愛成就のツアー
恋愛にご利益のある阿蘇神社（高砂の松)、浜神社（男性専用）にハート型の絵馬を奉納する。七夕にゆかりのある神社を訪問する。
阿蘇門前町のたのやでハート型の菓子を購入する。
映画『黄泉がえり』のロケ地を回って、人気俳優と同じことをする。

４　あか牛ウォッチング
あか牛が群れをなしているスポットの紹介をする。
干し草の大きな袋に絵を書き、ウシと一緒に写真を撮影する。
ウシにエサやり体験をする。

５　野焼きフェスティバル
昼は野焼き見学ツアーを実施し、夜は野焼きフェスティバルを開催する。

【２０１６－１１】

地域貢献活動報告書

１．企画名　　生き生きチャレンジキッズ
　　―クリスマスを待ち望む『アドベント』―

２．主催者　　井堀市民センター（北九州市小倉北区井堀３丁目１５番２号）

３．本学代表者　　事務部長　伊東幸雄

４．参加教職員　　稲木教授、古川教授、加來教授、藤田准教授、池田教育支援職員、
　　山村教育支援職員、西川図書課長、林田会計課会計係長

４．概要

・西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部(以下、「本学」という）は、井堀市民センター(以下、「市民センター」という）が開講している「生き生きチャレンジキッズ―小学校ではできない様々な経験から地域との絆や知識を学んでもらう―」ことを体験できる場所として、市民センターからの依頼を受け、企画・運営を行うこととなった。

・本学は、自らが進むべき方向のひとつに「地域に根差し、地域とともに歩む大学づくり」を掲げている。本学がこの企画へ参加することは、この目的達成と同時に、校区内にある小学校の子ども達との関係を持つことで、本学の取り組み（誰が、何を、どのようなかたちで行っているか）を体験してもらう。

・本企画への参加者は小学生が２５人、保護者７人、学生１４人（看護学科、福祉学科、保育科）であった。

・本年度は、開催時期がキリスト降誕日（クリスマス）前であることから、キリスト教主義学校である本学の特徴を生かして、小学生にクリスマスをテーマとしたお話とリースづくりを体験してもらった。

①開催日：２０１６年１２月１７日（土）９時３０分～１２時１５分

②進行：クリスマスのお話とハンドベルの演奏を聴く【写真①、②】、
　　学内探検（学内４か所をめぐってリース用の飾りを集める)、
　　布製ツリーを飾るリースづくり【写真③、④、⑤】

・学生には、事前に小学生が先を争って急ぐことがないよう注意喚起を行ったこともあって、当日の事故の発生はなかった。

５．評価

・本企画について、参加者である小学生からは、全員が楽しかった、うれしかったとの評価であった(市民センター集約のアンケートから)。

・また、保護者の方々からは、普段見られない表情をみた、工作が苦手な子が楽しそうであった等の評価であった(本学集約アンケートから)。

・本企画実施前には、市民センターと本学関係者が打ち合わせを行い、開催時期、当日の時間配分及び企画内容について、双方が意見を出し合い共通認識を持つ時間を確保した。

６．今後の課題

・課題としては次のことがあげられる。

①本学の特徴をどういった形で表現すれば小学生にも受け入れてもらえるか。

②開催時期はいつが適当か。

③学生への参加呼びかけをどういった方法で行うか。

７．御礼

・本企画は、本年度が２回目となります。市民センターの皆様には参加の機会を与えていただき大変感謝申し上げます。今後もよろしくお願いいたします。

・学生の皆様には、本企画の運営を全面的に担っていただきました。プログラムはすべてが滞りなく終了し、子ども達と保護者の方々に大きな満足感を与えることができました。大変感謝しています。ありがとうございました。

・また、本学教職員の関係者の方々におかれましても、通常業務の合間に本企画への提案を検討していただき、子ども達や保護者の方々に満足してもらったことに感謝します。ありがとうございました。

８．添付資料

・記録写真

・参加者からの感想

【参加の小学生からの感想（原文のまま※)】　※市民センター提供の資料

・去年より今年の方が楽しかった。
・難しかったけれどきれいにできてよかったです。
・昨年もあったけれど、昨年とは、ちがったので良かったと思いました。大学について、少し知ることができました。
・二回目だけど、前の本さがしよりもかんたんだったのでよかったです。ピアノのやつがかんたんでした。
・ちょっとむずかしかったけどたのしかったです。だけどもってかえれなくてちょっとかなしかったです。
・はじめてのたいけんだったけどたのしかったです。またいきたいです。
・リースづくりがすごくたのしかった。ＭちゃんとＡちゃんが２はんを手つだってくれたから早くおわったよ。
・むずかしかったけど、たのしかったです。
・西南女学院に行くのは二回目だったけど前回と同じくらい楽しかった。
・始めてクリスマスリースをつくってとても楽しかった。
・去年より今年の方が楽しかった。
・リース作りを教えてもらって、いい物が作れた。去年より楽しかった。
・きょうきてたのしかったです　いっぱいつくったのでたのしかったです。
・２回目だったけど、きょ年よりか楽しかったから、また来たいと思いました。
・自分できれいにかざれてよかったです。たのしかったです。
・かいだんの、もんだいを、とくのは、かんたんだったけど、かいだんのもんだいをさがすのはむずかしかったです。
・こんないいろいろなたんけんとかをできたからまたここにきたいです。
・今日は、宝さがしして１番にゴールできたのでうれしかったです。
・今日西南女学園にいってたからさがしをしてその宝できれいなリースを作れたのでうれしかったです。
・けんをあつめてリースをつくるのがたのしかったです。らい年も、つくりたいです。
・リースをつくるのがむずかしかったです。
・ピアノをはじめてひきました。本をさがすのがかんたんでした。リースでトナカイをつくるのがたのしかったです。
・西南女学園に行って宝さがしをしたり、リースをつくったりして楽しかった。
・リースを作ったよ。名前は、「Ｍちゃん」と「Ａちゃん」と２はんだったよ。図書かんと、音がくしつと食どう、かんだん教室で、いろいろしたよ。「たのしかった」
・今日、西南に行来ました。西南のおねえちゃんたちに手つだってもらいながら学校をたんけんしたりクリスマスツリーをかざったりしました。とてもたのしかったです。

【引率された保護者の皆様からの感想（アンケート自由記入欄から)】

・クリスマスの講話は初めて聞くことで子供にもいい話でした。ハンドベルなどクリスマスを楽しめました。
・学生さんには大変お世話になり、ありがとうございました。いつもはついお手伝いとなりますが、全てお任せしました。
・日頃は通ることはあっても中に入ることがなく、学生さんたちとの触れ合いもでき、きょう一日感謝です。来年もよろしくお願いします。
・男女を問わずに楽しめる企画をしていただき、親子で満喫させていただきました。
・大学に入る機会がないので、子どもたちにはとても見聞を広げる良い機会になったと思います。
・また、クリスマスの話は家庭で話すことがないのでとてもよかったです。ありがとうございました。
・男子でしたが、とても楽しく製作していました。新たな面が見えました。
・準備が大変だったと思います。ありがとうございました。
・子どもたちはとても楽しそうにいろいろ考えて作っていて、とてもよかったと思います。また来年もしたいです。
・工作は好きでない次女が楽しそうに黙々と作っていました。とても楽しそうでした。
・大人も楽しめました。
・私語をする暇がないくらい真剣に取り組んでいたのがうれしかったです。
・大人も子供以上に真剣にさせていただきました。
・個性あふれる作品に感激しました。とても楽しかったです。

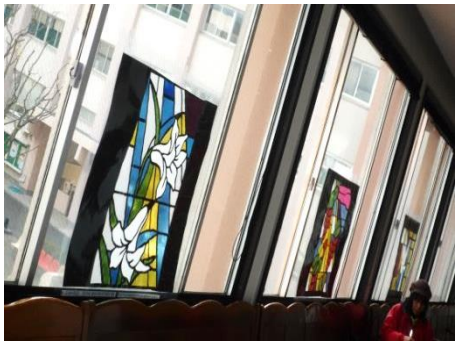
【学生の感想】

・図書館の本探しが一緒に楽しめました。
・子ども達が人懐っこくとてもかわいらしかった。
・子ども達とすぐに打ち解けられてうれしかった。
・リースづくりは、子ども達にそれぞれの性格が現れていて感心しました。リースがどれも上手で個性的でびっくりしました。
・子ども達と関わられてたのしかったです。

「生き生きチャレンジキッズ」in Seinan Jo Gakuin　12 月 17 日（土）　9:30～12:15

①↑　　↑ マロリーホール　　↓ 331 講義室　　↑②

←③



←④

←⑤

「お菓子の家」の展示発表会を通じた参加型体験学習による地域貢献の取り組み

西南女学院大学短期大学部　生活創造学科　　木村久江

【目的】

○「お菓子の家（本学ではジンジャーブレッドハウス)」の創作授業において各個人で制作した作品を、学外で展示・発表することにより、授業で聞くだけにとどまらない体験型の学習を行うこと
○展示会における来訪者との交流を通じて、調理製菓スキルの向上だけではなく、学生の会話、討議、企画などのコミュニケーションの能力を向上させること
○来訪者との「ミニチュアお菓子の家」制作講習会のイベント企画などを展示と併行して行い、地域社会の方へ食育体験の場を発信・提供し、学生に地域交流を体験させること
以上、アクティブラーニングとして学生にどのような力を伸ばせるか、地域連携や貢献の成果をどのように学生に意識させ自分の大学への貢献感や所属感を醸成できるかの二つの点を踏まえて、今までの学習過程を改善、整理することを試みた。

【内容】

一連の展示発表会において企画した体験学習の内容は、以下の表にまとめる。「お菓子の家」の作品展示発表会の開催、学生のフィールドワークとしての来訪者へのインタビューとそれを通じた交流、制作体験イベントによる交流である。全ての活動においてインシデントは無く、表１に内容を示す。

表 1.　2016年度「お菓子の家」展示・交流企画の概要　　（アンケートは無記名）

開催場所	開催テーマ	時期	概　　要	アンケート調査記入者	入場者数
小倉城内 北九州市小倉北区）	国際交流をしましょう アジアの人の知らない世界	2016. 5.8 ～6.5	・小倉城 4F 市民の大広間における作品展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った 展示会、国際交流イベントと同時開催）。	合計 374名	約13870名 （小倉城 調査結果）
小倉井筒屋本館 8階 北九州市小倉区）	童話の世界で心豊かに	2016.12.7 ～12.12	・デパート内共用スペースにおける作品展示 ・「ミニチュアお菓子の家のデモンストレーション」と題し、親子の参加を募り、ミニュチア版お菓子の家の制作講習を行った 展示会と同時開催）	合計 579名	160255名 （小倉井筒屋 調査結果）
福岡銀行 北九州営業部 2階ロビー 北九州市小倉北区）	オリジナルツリーとともに童話の世界で心豊かに	2016.12.14 ～12.22	・福岡銀行オリジナルクリスマスツリーとお菓子の家卒業作品を共同展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家製作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った 展示会と同時開催）。	合計 38名	約5600名 福岡銀行 調査結果）
北九州市水環境館 北九州市小倉北区）	童話の世界で心豊かに	2016.12.23 ～2017.1.16	・水環境館共用スペースでの作品展示 ・「ペーパークラフト及び段ボールによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った 展示会と同時開催）。	合計 339名	12500名 （水環境館 調査結果）
高齢者複合施設 「ふれあいの里とばた」	お菓子の家で癒しの空間を	2017.1.31 ～3.24	・高齢者複合施設における作品の展示と施設の慰問		展示中
北九州市立医療センター 北九州市八幡病院内 健和会大手町病院内	お菓子の家で癒しの空間を	2017.1.31～2.13 2017.1.3 1 ～3.24	・病院共用スペースにおける作品の展示 作品は、一部づつ分けて展示）		展示中

【評価】

<u>○来訪者の感想が与えた学生への達成感、満足感</u>

表-1 に示す如く、各展示会の多くは期間中１万名を超える見学者を集め、各展示会で数百名の方々から学生がフィールドワークにより直接アンケート回答をいただいた。来訪者数および来訪者から寄せられた選択式および自由表示の感想から（別冊のパワーポイント資料参照）選択式回答では半数を超える回答者から、「かわいい」「夢がある」「癒された」「見る機会があった良かった」「食べたくなった」などの肯定的な感想をいただいた。また自由記載においても、「心が癒されてやさしい気持ちになった」「手間と愛情が感じられ

る」「細かなところまで工夫されている」作品の技巧への称賛のことばや「今後も続けてほしい」「楽しい気持ちにされてもらってありがとう」などの作者への激励をいただき、学生に授業では経験できない達成感、満足感を与えるものとなった。

○学生の感想記述（表２）からの分析

学生の自由表記から抽出された内容からは、自己に対する「能力感・自己肯定感の向上」と「貢献感の向上と実感」、他者や地域に対する「信頼感・所属感の向上」が伺える。これら学生達の感想から、一連の展示会において学生自身が得た達成感や満足感の要因は、インタビューにおける自分達の作品への共感や称賛であったことはもちろんのことであるが、加えてコミュニケーションそのものができたこと、自分の話を他人が聞いてくれたことや説明できたことに驚きや喜びを感じていることが分かる。

表２.　学生の感想　参加全学生９人の感想を各視点で抜粋）

	感　想　の　記　載　の　抜　粋
作品完成の達成感	･クッキーの生地やアイシングを一から作り、自分で考えたお菓子の家が作れて、自信となった。 ･限られた時間の中で、自分で計画を立て、自分で作業を進めていく事の難しさを学んだ。
自分自身で努力し成長できたこと	･作業が円滑に進むために自分が何をしたら良いのか考えられるようになった。 ･演習という授業を受け、通常の授業では学べないことを多く学んだ。 ･自分自身が一生懸命に作ったものが他人に評価され、人の意見や、他人の価値観に触れることができて、心の面で成長したように感じ、社会に一歩近づいたような気がした。
知らない人たちとの交流からの達成感	･地域の方と関り、コミュニケーションすることができ、社会に出た時の態度などの勉強になった。 ･外国の人と話す機会が持てて、言葉が通じなくても楽しい時間が過ごせることが分かった。 ･様々な場所で、地域の方と話す機会ができて、自分のコミュニケーション能力が上がったように感じた。 ･地域の方と直接話すことができて、喜んでくれている顔が直接見れて良かった。 ･目上の人への立ち居振る舞いや言葉遣いや態度など社会に出た時に役立つように教えてもらった。

お菓子の家という苦労して制作した作品を単に見てもらえたことだけでなく、来訪者との双方向のやり取りができたことが、学生達の成功体験を作っているということだと思う。短期大学生にとって、見ず知らずの人と話しをする機会は授業において得難いものであり、特に年齢の離れた成人と会話することそのものが、これまであまり経験が無いことであった。学生達は、自分の知らない他人との交流において、自分から話ができたこと、聞いてもらえたこと、温かい言葉をかけたもらったこと、意見がもらえたことなどに達成感を感じており、「コミュニケーション力」「傾聴力」「会話力」などが社会において必要であることを経験として知ることができたと思われる。

また、この達成感は、この体験を与えてくれた大学へ帰属や所属への満足感に繋がっていくと考える。

○授業評価アンケート結果

授業・演習終了後に、学生に対して自己評価アンケートを無記名で実施し、達成度や満足度を 5 点満点で評価してもらった。以下の設問「コミュニケーション力や表現力を高めることができた」「授業において話し合い、発表などの参加する機会が作られた」に対する評価点の受講者平均は、それぞれ 4.7 点、4.4 点であり、今回の地域貢献の取り組みは、アクティブラーニングとしても評価できるものと思われる。

○地域連携における自治体からの評価

平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月までに小倉北区で開催された作品展示会やお菓子の家の制作イベントが、北九州市市民文化スポーツ局が主催する平成 28 年度の「まちづくりステップアップ事業」として認定された。これは北九州市が、地域住民の交流の促進となる活動、まちづくりにつながる研修等の活動、国際交流の促進にかかわる活動、子どもの健全育成に関する活動等を支援する事業に対して認定するものである。

○決算　（2017 年 3 月 31 日）

支出額　407,061 円のうち、北九州市小倉北区助成金　173,000 円（まちづくりステプアップ事業）

○謝辞

本学の各展示会に来場し、アンケートなどに協力していただいた地域の方々、また企画に賛同し会場を提供いただいた、北九州市、株式会社井筒屋、福岡銀行北九州営業部、小倉城、北九州市水環境館、病院（医療センター、八幡病院、健和会大手町病院)、高齢者複合施設「ふれあいの里　とばた」の皆様に感謝申し上げます。

【２０１６－１３】

地域貢献活動報告書

1.　基本情報

企画名：　カンボジア教育支援プロジェクト ANAKOT
（カンボジア・スタディ・ツアー）

組織名：　西南女学院大学ゴールデン Z クラブ

代表者：　塚本美紀

2.　概要

本企画の目的は、カンボジア特産の黒胡椒を使ったクッキーを作成・販売し、その利益で図書を購入し、カンボジアの高等学校に寄贈することである。さらに、現地を訪問することで、文化や社会経済的状況が大きく異なる国での滞在を通して、地球上のさまざまな人々のことを尊重する態度を養うと同時に、英語が公用語でない国で、英語を用いることで英語が国際語として使用されていることを学ぶことが期待できる。対象は、西南女学院大学ゴールデンＺクラブのカンボジア教育支援プロジェクトに参加している学生で、カンボジア・スタディ・ツアーには2名の学生が参加した。本企画では、事前学習会を行い、現地のことを学んだ後、実際に現地に赴き、これまで教科書や図書を贈り支援してきた学校に、図書を寄贈し、生徒たちに対して、英語を用いた言語活動や日本文化紹介等を行った。さらに、遺跡や博物館等を訪問し、歴史や文化等について学んだ。また、寄贈する図書の購入費用を得るために、年間を通じて、北九州市小倉北区にある洋菓子店ドレスデンで黒胡椒クッキーを作成し、大学生協、大学祭、その他近隣のイベントなどで販売している。同時に、カンボジアについて学ぶために、年間を通じて定期的に学習会を実施し、担当の学生が予め決めておいたテーマについて調べて発表したりしている。

カンボジア・スタディ・ツアーを実施したのは、2017年2月17日（金）から24日（金）の期間で、2月17日から20日まではプノンペンに滞在し、寄贈する図書の購入、王宮、国立博物館、キリング・フィールド、トゥールスレン刑務所等の見学、バテイ高等学校での図書贈呈式参加及び文化プログラム実施等を行った。図書の購入に際しては、事前にバテイ高等学校の関係者にどのような本が必要かということを相談し、バテイ高校の卒業生である大学生に購入の手伝いをしてもらった。カンボジアでは英語を話せることが条件の良い奨学金や就職へとつながるため生徒の英語学習への動機付けが高いことと、バテイ地域では英語の本を手に入れることが大変困難なことから、今年度は英語の図書を寄贈した。21日から23日まではシェムリアップに滞在し、農村訪問、日本語学校での日本語模擬授業、アンコールワット等の遺跡見学を行った。農村訪問では、ゴミ山を見学しシェムリアップのゴミ問題について学んだり、バナナ・ペーパー工房を見学し農村の人々の現金収入を得る方法について学んだりした。バテイ高等学校の図書贈呈式には300名以上の教員と生徒が、

日本語学校の模擬授業には1名の教員と13名の生徒が参加した。今年度、バテイ高等学校に寄贈した図書は45冊である。

3. 評価

スタディ・ツアーを終えたばかりであるため、詳細な分析はこれからしていきたいが、現時点での評価について記したい。１年間の活動の成果としてバテイ高等学校に図書を寄贈することができたので、大きな目的は達せられたと言える。参加した学生は、日本での便利な暮らしとは大きく異なる環境に身を置き、最初は戸惑いも多かったようだが、すぐに適応していった。異文化能力については、AAC&U(Association of American Colleges and Universities) (2009)が開発したルーブリック“Intercultural Knowledge and Competence (IKC) VALUE Rubrics を使っての評価を考えていたが、本企画のような短期間の海外体験にはこのルーブリックは適さないことがわかったので、より良い評価の方法を今後考えていきたい。

4. 決算

現在作成中である。

5. 謝辞

バテイ高等学校訪問については、長年バテイ高等学校で教育支援を行っている NPO 法人 ACROSS と理事の Sokhom Leng 氏、バテイ高等学校の校長先生はじめ諸先生方に大変お世話になっている。図書の購入については、バテイ高等学校の卒業生で現在 University Of Health Science の学生である Sin Sreyneth さんに大変お世話になった。黒胡椒クッキーの作成については、洋菓子店ドレスデンさんに年間を通じて多大なご協力をいただいている。農村訪問については社団法人クマエの山勢代表に、日本語学校訪問についてはキム先生に大変お世話になった。本企画は、ここの記した以外にも多くの方々のご協力のもとに成り立っている。ご協力くださったすべての方々に、ここに感謝の意を表する。

6. 文献

Bennett, J., Brown, K., Cartwright, C., Davis, M., Deardorff, D., Hearn-Chung Gin, D., & Smith, D.G. (2009). Intercultural knowledge and competence VALUE rubric. Washington,D.C.: Association of American Colleges and Universities. Retrieved from http://www.aacu.org/value/rubrics/index_p.cfm?CFID=41339661&CFTOKEN=69849038

【２０１６－１４】

地域貢献活動報告書

① 基本情報

企画名　北九州市の食の魅力 PR パンフレット作り

組織名　WILL (Women Innovation Launching Laboratory)（地域貢献の学生団体）

代表者　須藤秀夫（WILL 顧問）　末吉春香（WILL 代表、　報告発表者）

② 概要

目的　市民、県民、県外の人々に北九州市の食の魅力を認知してもらうこと。
ひいては、北九州市への来訪を促すこと。

対象　（メリットを得るであろう受益者）北九州市の市民、食品業者など

内容　北九州市の食の魅力を市内、県内、県外にアピールする冊子（色刷り）を作成する。

WILL 学生の役割は、広報企画、写真撮影、被写体としての PR など。
北九州市産業経済局食の魅力創造発信室からの依頼と連携による。
西日本リビング新聞が写真撮影、紙面デザインなど担当。

背景１　北九州市産業経済局食の魅力創造・発信室から、WILL が PR 部隊「ぬか小町」などの形で 2015 年度のぬか料理をテーマとしたイベント「ヌカ・オブ・ザ・イヤー2015」で連携・協力した関係や実績を踏まえて、WILL に再度協力依頼があったもの。

背景２　PR 冊子について、北九州市産業経済局観光課からの依頼と連携の下、WILL は 2016 年 3 月に「北九州を楽しむ。オトナ女子旅」のパンフレットを制作した実績がある（アヴァンティ社の協力)。20,000 部が印刷され、市内で配付されたほか、福岡市や名古屋市での EXPO 等でも活用された。

参加者数：　WILL の学生 14 名

実施内容・時期：

これまでの活動

1 月 23 日　千春にて取材
2 月 1 日　きくたろうにて取材
2 月 3 日　ぬか炊き、焼うどん
2 月 6 日　馬島にて取材
2 月 7 日　土産品

2 月 9 日　ゆるキャラ「とよみつ姫」表紙撮影　キタキュウマンとの撮影
本学にて
2 月 17 日　合馬のたけのこの取材
2 月 23 日　藍島、若松トマト

今後の予定
3 月末までに　冊子完成

インシデント：　該当なし

③ 評価

アウトカム評価:　現状該当なし(5 月上旬の主たる活動がまだ為されていないため)

プロセス評価：

大きなイベントに参画することを通して、また、社会人（市の職員や業者等）との折衝を通して、学生は物事を進める段取り、有効な広報やコミュニケーションの手法・スキルなどを学んでいる。また、自身の適性・強味弱みなどの気づきを得ている。

企画の妥当性と今後の課題

上記目的があり、有意義なイベントであると思う。

課題は、ぬか炊きを全国的に認知してもらう上で更なる取り組みが必要であろうこと。

④ 決算

該当なし　（市の予算にて準備、実施されるものにて　全体予算は不詳）

⑤ 謝辞

再び活動の舞台を与えて頂き、またご指導頂いている北九州市役所食の魅力創造・発信室様には心より感謝申し上げます。

⑥　文献　　該当なし

地域連携室
Ｅメール：chiiki@seinan-jo.ac.jp